

老足之儀なれば、別當之御祈念懇申候上者、無相違可有執行者也。仍爲後日之狀如件。

弘安元年戊子拾月廿七日

宇留地七郎右衛門入道沙彌義連印

能登國穴水南方來迎寺別當

按ずるに、信連殿御前とあるは、來迎寺境内なる信連の肖像をいへり。弘安元年は、信連卒せられし建保六年より六十一ヶ年後なり。されば右七郎衛門入道は、宇留地長氏の祖四郎左衛門尉の子なりけん。さて其の子孫は、加藤系圖に、享保四年十一月於加州津幡一戰、能登勢敗軍、島山大隅始島山家人數百人、御家人宇留地彦右衛門等數十輩討死す。とあり。また永祿四年五月島山義則主、長對馬守續連が七尾の邸へ御成記に、御家子一番宇留地孫四郎、二番阿岸新次郎拜調の由記載せり。さて寛文七年八月浦野孫右衛門の事に付、孫右衛門宇留地平八自盡、同せがれ三人殺害せられ、子孫斷絶せり。

○阿岸長氏傳略

長谷部系圖に、信連五男五郎某、櫛比庄阿岸之地頭。とあり。

り。是も長家庶流五家の一家なり。阿岸は鳳至郡の郷名にて、阿岸本誓寺所藏永祿元年七月の古文書に阿岸村と見え、櫛比庄道下寶泉寺所藏天正七年七月の判書にも阿岸村とあり。此の村今は南村といへり。阿岸長氏の子孫は、永祿四年正月島山義則主、長對馬守續連が邸へ御成記に、御家の子一番宇留地孫四郎、二番阿岸新次郎。と見え、由比氏系圖に、二代由比勘兵衛光清妻、能州島山家臣阿岸與市郎娘。とあり。信連記に、長家士浦野孫右衛門一件に付、孫右衛門男浦野兵庫弟阿岸掃部同せがれ一人、前田又勝へ被預、寛文七年八月廿九日割腹、男子殺害命ぜられたるよし見ゆ、此の時宇留地氏と共に子孫斷絶すといへり。阿岸氏傳書に、此木上野宇留地阿岸山田、此の五家之先祖は信連之息男也。中にも阿岸は家跡斷絶、能州島山修理大夫義則之娘何方へも嫁付不申内、島山家滅亡。右娘其の後京都に被居、或公家家に馴合ひ、女子一人出生す。然る處長如庵被尋出、母子とも能州へ呼越し養育有之。右女子は如庵養女に成り、家臣中村八郎左衛門へ嫁娶、女子出生。此の娘阿岸掃部之妻と成り、亦女子出生。掃部妻并娘、島

山家之胤孫たるに依つて、長家より上下四人分扶持方、諸入用月々見計指遣したる旨記載す。信連記にも、彼の息女は成人の後、家來中村八郎左衛門妻に被申付。八郎左衛門に又娘出來て、阿岸掃部之妻に成る。是島山家胤子の畢り也。彼の息女が母島山の御内は、利家卿の御意に依つて連龍が妻と成り、男子出生す。長十左衛門是也。とあり。

○山田六郎左衛門家傳

家譜に云ふ。始祖六郎某。長谷部信連之六男、被補能州鳳至郡山田郷地頭。故以山田爲稱號。自六郎至和泉歷代文明年間以來、依能州兵亂系譜紛失焉。和泉若名小六郎。後改十郎。其後改主計。仕于九郎左衛門尉英連。度々有戰功。能州奥郡棚木正院等之戰場與英連合戰。且役儀之品有之由傳承。大永年中。能州之主島山家之一族棚木左衛門企逆意。棚木城楯籠。可有誅伐之由。英連出勢。押詰棚木城之節。討取坪岡源八郎。其後於佛木一戰之節。盡粉骨被手薙。島山家出張越中表。此時英連扈從。於苦竹原一戰之節。和泉亦爲力戰討死。敵兵石上八郎揚勇名焉。其餘之事跡不傳來。和泉子十郎。若名小六郎又齋宮。仕于英連及綱

連。天文十二年十二月。能州之主島山修理大夫義續之老臣遊佐美作續光、企逆意。越中之豪士鞍川肥前清房、同筑前清經等喋合。鞍川父子率軍勢。出張能州七尾。而放火近郷之民屋。而亂入天神河原田。此時續光守衛屋形。籠于七尾城。衆相圍越中勢。使殺屋形及不順己者襲能州。然飯川肥前義宗密告此事於屋形。屋形驚。密與義宗逃出城。往對馬守續連邸。議誅伐遊佐等。於是告島山諸臣馳集焉。續光所謀不中。故徒率兵。加于鞍川陣。于時屋形命先陣於對馬守續連。命二陣於溫井備中。其外神保氏、平氏、譽田氏、三宅氏等之兵正列而次之。而景長兄備中景家者、自前々爲島山家之先鋒。此時景長齡十九歲而初陣也。故切請爲先鋒。續連亦感其志。告之屋形令先陣。續連備二陣。鞍川氏智勇之將有謀慮。便使遊佐退。其身亦率兵伴退。續連乃噲留退敵於飯川石塚迫合。進退及七度之時。溫井景長謀時真。一戰焉。續連從一手押懸。追散越中勢。悉討勇士。此時十郎力戰討取敵兵。揚勇名。其身被疵。其後弘治年間越後太守長尾景虎。浮兵船亂入能州之時。十郎爲將率兵。與越後勢戰于富木松之下邊海。遂討取敵首十餘級。其後越後勢亂入